断章 旭川のアイヌ語地名研究 ㊸

高橋 基

知里真志保も山田秀三も、カムイスキーリンクススキー場のある神居山（七九九・二㍍）は、「ハルシナイカムイシリ（harushnai-kamuishir 春志内の・神山）―春志内川の水源の山」としている。ところが、明治三十年製版の『北海道仮製五万分一図』では、神居山のアイヌ語名は、「オタオシマックタアンヌプリ」となっていて、この地図を参照していながら、二人とも、このアイヌ語地名については一切触れていない。幻のアイヌ語地名であった。

「オタオシマックタアンヌプリ（ota-osmak-ta-an-nupuri 川岸の砂原・の後ろ・に・ある・山）」と読むことができる。すなわち、「オタ（地名）」というアイヌ語地名の後ろにある山―という意味である。ところが、安政四年（一八五七年）に調査した松浦武四郎の調査記録にも、「オタ」という地名は記録されていない。「オタ（ota 砂、川岸の砂原）」のつくアイヌ語地名は、和人によって、しばしば漢字表記の「歌」とされる。その代表的なものが、「歌志内（ota-us-nay 砂浜が・ついている・川）オタ・ウシ・ナイ→オタシナイ→歌志内」、「歌登（ota-nupuri 砂・山）オタ・ヌプリ→歌登」などである。

―神納橋から神居古潭まで（下）―

松浦武四郎の調査から十六年後の明治六年、開拓使測量長・ワッソン通悟の『北海紀行』に、「オタ（ota 砂）」の和人の訛り表記の「ウタ（砂）」の地名が記載されている。管見では唯一の資料である。ワッソン一行は、アイヌの人たちの漕ぐ丸木舟に乗り、①ナイタイベ川（内大部川）からカムイコタンに向け遡上した。その部分を紹介する。掲載図は現行の五万分一図で、文中のアイヌ語地名の①～④の位置を表示した。

「①ナイタイベ川アリ。上川郡ノ境ト定メタル地ナリ。流急・石出テ瀬声高ク、岩石ノ間ヲ漸ク上ル所アリ。舟屡々転覆セントス。又半里、②ウタニ泊ス。「ウタ」ハ砂ノ義ニテ、岸上砂ヲ布クル平地アリ。他ハ多ク断崖ニシテ崖上ハ山ナリ。六月八日―十町余、③ヲウラオンナイ（右小川）、十町、④ワラモイ。此処ヨリ両岸絶壁・奇石怪岩ノ間ヲ舟行ス。」

①のナイタイベ川は、現・内大部川、③のヲウラオンナイは、前々号掲載のオランナイ（o-ram-nay 川尻・低い・川）で、④ワラモイは、パラモイ（para-moi 広い・湾）の訛った表記で、カムイコタンの入り口である。

さて、幻のアイヌ語地名の②ウタは、平林通悟が書いたように、「ウタハ砂ノ義ニテ」と、ウタ＝オタ（ota 砂、川岸の砂浜）で、この周辺は、両岸が崖で、ここだけが、砂を敷いた平地なので、アイヌの人たちが、ここを「オタ（ota 川岸の砂原）」と言い、ワッソン一行は、明治六年六月七日、ここにテントを張り、宿泊した記念すべき土地であった。

神納橋の左岸は、現在も川砂が堆積し、オタ（ota 川岸の砂原）のアイヌ語地名の要素を残している。写真は、⬇印から撮影したもので、神納橋から見る神居山は、正にオタオシマックタアンヌプリがぴったりの山である。**（アイヌ語地名研究会幹事）**

※毎月第1週号に掲載します